

東日本大震災のフィールドワーク2 最終レポート

地域住民が消防に参加する意義  
—東日本大震災を経験した消防団員の「語り」を通して—

吉澤 諒泰

目次

第1章 序論

第1節 問題の背景

第2節 先行研究

第3節 問題の所在

第2章 大坂さんのライフストーリー

第1節 出会い

第2節 大坂さんのプロフィールと入団経緯

第3節 震災の経験

第4節 震災後、団長になって

第3章 地域住民が消防に参加する意義

第1節 物理的な面と精神的な面

第2節 つながりが生まれる場所

第3節 今後の展望

第4章 終章

第1節 これまでのまとめ

第2節 きたるべき災害に備えて、消防団はどう変わるべきか

参考文献

## 第1章 序論

### 第1節 問題の背景

わが国は、言わずと知れた災害大国である。私が生きた過去 20 年でも新潟県中越地震、東北地方太平洋沖地震（東日本大震災）、熊本地震など多くの大災害がこの国を襲った。そして今年に入ってすぐに能登半島地震が発生した。能登半島地震では、政府の初動の遅さが防災の専門家からも指摘された<sup>1</sup>。こうした大規模災害において重要な役割を果たすのが地元の消防団である。しかし、消防団は現在全国的に減少しており、団員の高齢化や人員確保など多くの課題を抱えている。

### 第2節 先行研究

#### 2-1 地域社会における消防団の位置付け<sup>2</sup>

消防団の歴史は古く、江戸時代に八代将軍吉宗が町火消を設置したことが起源とされる<sup>3</sup>。「消防団」はよく「消防署」と混同されやすいが、これらは別組織である。消防署・消防本部は「常備消防」と呼ばれ、消防を本職とする消防隊員や救急隊員が 24 時間体制で 119 番通報や災害に対応している。一方、消防団は「非常備消防」に位置付けられ、団員は普段他に職業を持っている地域住民である。消防団員は法律上非常勤の特別地方公務員とされているが、実態は地域住民がボランティアのような形で行っている。消防団は地域密着性、要員動員力、即時対応力といった特性を生かしながら、消火活動をはじめとして、大規模災害時には住民の避難誘導や災害防ぎょ等を行なっている<sup>4</sup>。特に、消防本部・消防署が設置されていない非常備町村では、消防団が消防活動の全面を担っているという実情があり、地域の安全確保に欠かせない存在となっている。その他にも、地域の防災訓練や火災予防活動など地域防災力の向上や地域コミュニティ活性化にも大きな役割を果たしている<sup>5</sup>。

#### 2-2 消防団不要論から見直し論へ

戦後常備消防（消防署）の充実化が進むにつれ、消防団は廃止しても良いのではないかと、前近代的な組織ではないのかという議論が起こったこともあった<sup>6</sup>。しかし、この議論を変えるきっかけとなったのが、1995 年に発生した阪神淡路大震災である。兵庫県の北淡町では、普段から消防団と地域住民の間で協力関係が築かれており、消防団の指示に基づいた避難がスムーズに行われたという。阪神淡路大震災での活躍をきっかけに、消防団は地域防災の中核的存在として再注目されるようになった。

---

<sup>1</sup> 清水 航己（2024 年 2 月）「能登半島地震、初動対応に問題も防災研究の第一人者は『発災からこれまで』と『これから』をどう見るか」、47news

<sup>2</sup> 濱口 和久（2020 年 3 月）「地域社会における消防団の位置付けと課題について」拓殖大学政治行政研究 11 19-36

<sup>3</sup> 総務省消防庁公式 HP「消防団の歴史」<https://www.fdma.go.jp/relocation/syobodan/about/history/>

<sup>4</sup> 総務省消防庁公式 HP「消防団の現状と課題と検討の方向性」

[https://www.fdma.go.jp/singi\\_kento/kento/items/kento259\\_03\\_houkoku1.pdf](https://www.fdma.go.jp/singi_kento/kento/items/kento259_03_houkoku1.pdf)

<sup>5</sup> 濱口 和久（2020 年 3 月）

<sup>6</sup> 濱口 和久（2020 年 3 月）

### 第3節 問題の所在

しかし、消防団は現在、非常に厳しい環境に置かれている。団員が年々減少傾向にある上、団員の高齢化が顕著になっているのだ。消防庁の統計によると、昭和45年の消防団員の平均年齢が32.5歳だったのに対し、平成17年では37.6歳<sup>7</sup>、令和2年では41.9歳<sup>8</sup>となっている。このまま団員減少と高齢化が進めば、非常時の活動に大きな支障が出てしまう。実際、岩手県の釜石市では、火災の出動要請に十分な団員を集められず、ポンプ車が出動できないという事例も発生した（2024年1月）<sup>9</sup>。総務省消防庁の検討会は、団員減少の原因として就業構造における被雇用者の割合の増加、価値観の多様化や地縁の消失による地域コミュニティ機能の低下や少子高齢化を挙げている。

今回の実習では40年以上陸前高田市で消防団として活躍してきた団員の方にインタビューすることができた。本稿の目的は次の二つである。一つ目は、震災で実際に活動にあたった大坂さんのライフストーリーを記録することだ。二つ目は、消防団の方の目線から消防団のあり方を見つめ直し、地域住民が消防に参加する意義を見出すことである。また、終章では消防団の衰退を食い止めるべく、消防団の今後のあり方や解決策についても考察を試みる。

---

<sup>7</sup> 総務省消防庁「I 消防団の現状と課題と検討の方向性」

<sup>8</sup> 総務省消防庁「令和2年版消防白書」

<sup>9</sup> NHK Web（2024年3月）「【震災13年】消防団員の減少が深刻化 地域のつながりにも影響」

## 第2章 大坂さんのライフストーリー

### 第1節 出会い

#### 1-1 筆者について

今回インタビューをした大坂さんの紹介の前に手短かに筆者（吉澤）の紹介をさせていただきたい。私がそもそもこの授業を選んだ理由は卒業後の進路に関係している。私は履修登録の段階で警察官を目指しており、その後試験に受かり4月から警察官を拝命する身となった。大規模災害では、消防だけでなく、警察も全国から応援に駆けつけ救助・捜索活動等に従事する。また警視庁では「きずな隊」というチームが避難所を回って被災した人たちの心のケアや生活相談を行っており、災害と警察は切ってもきれない関係にあることがわかる。しかし、私は大きな災害を経験したこともなければ、災害ボランティアの経験もなく、「災害」や「被災地」がどこか自分から遠い存在に感じてしまっていた。そこで、私は警察官になる前に実際に陸前高田へ行き、災害の爪痕や復興の様子をこの目で見ておきたいと思いこの授業を履修することにした。

#### 1-2 きっかけ

今回のフィールドワークで、私は消防団の方にお話を伺いたいと考えていた。理由は震災直後にテレビで流れたあるシーンを私はずっと覚えていたからだ。それは、積み上がった瓦礫の中、必死に仲間を捜索する消防団員の姿を映したものである。自身も被災者であるのにも関わらず、半纏を着て一生懸命捜索する姿は、当時小学2年生の私にとって非常に印象的だった。彼らはどのような気持ちで活動に当たっていたのか、そしてその後震災とどのように向き合ってきたのか知りたいと思った。そこで、まず筒井先生からお知り合いの消防団の方を紹介していただき、さらにその方に団長の大坂さんを紹介していただいてインタビューを行う運びとなった。

### 第2節 大坂さんのプロフィールと入団経緯

- ・名前：大坂 司（おおさか つかさ）さん ・年齢 65歳
- ・入団：昭和57年 ・消防団歴 42年
- ・役職：陸前高田市消防団団長（2011年当時は竹駒分団副団長）
- ・インタビュー実施日時・場所  
（第1回：2024年8月6日17時～19時 陸前高田市防災センターにて）  
（第2回：2024年11月3日13時半～14時半 電話にて）

※以下インタビューのトランスクリプトでは大坂さんを Ot、筆者（吉澤）を\*1、同行者の岡庭さんを\*2と表記する。

#### 2-1 衝撃的な入団経緯と意外な共通点

インタビュー冒頭、大坂さんは消防団の入団経緯を語ってくれた。消防団というと、私は訓練や行事が大変そうなイメージを抱いていたので、なぜ大坂さんが入団を決意したのか非常に気になっていた。大坂さんは今から40年以上前の昭和57年、私と同年の22、3歳の時に消防団に入団した。話を伺ったところ自らすすんで入団したわけではないようで、そこには当時ならではの驚きの事情があった。

Ot：まず消防に入ったきっかけっていうのは、昔この辺では普通大体こんな感じだったんだけど、ある日仕事終わって家に帰ったら、消防団の半纏とズボンと一式がおいてあったと。これで入団なんですよ。

\*1：えっ（・・・）じゃあ自ら入ってきましたじゃなくて？（・・・）

Ot：じゃなくて。消防団の方で大体目星つけとくわけね。次はあれがそろそろいい年頃だとか、こっちがいい歳だからとか、それで大体の目星をつけておいて、ある日消防の服装がおいてあると。これがけっこうこうゆう風にして消防団に入った人が多いんだよね。

\*2：そうなんですね（・・・）。

もちろん、これはあくまで当時の話であって現在ではこういった手法の勧誘は一切行われていない。大坂さんは当時、小学校から社会人までずっと野球をしており、野球を続けたかったため二十歳頃までは入団を待つように頼んでいたが、とうとう二十二、三の頃に消防の服が家に届けられ、「これはもうだめだな」と諦めて入ったそう。

さらに大坂さんと私には意外な共通点があった。実は、大坂さんも高校卒業後、私と同じく警察官を目指したらしい。岩手県警を受験し二次試験も合格したものの、当時新米警察官は成田闘争の警備に駆り出されており、さすがに危険だと親御さんに反対されてサラリーマンになったそう。私は意外な共通点を見つけることができ嬉しかった。

ところで大坂さんは、消防団長を務める傍ら床屋さんを営んでいる。床屋さんを始めたきっかけを伺ったところそれはなんと大坂さんの奥さんだったという。

\*1：現在床屋さんをされているじゃないですか。それはいつから？（・・・）

Ot：これはね、最初30までサラリーマンだったの。そして26歳の時に結婚した嫁さんが床屋だったんですよ。それで、嫁の弟子入りして（・・・）

\*1\*2：へえー（・・・）

Ot：ことごとく変わってるでしょ（笑）

もし、お客さんの散髪中に出動の要請が入ったらどうするのか聞いたところ、奥さんに後を頼んですぐに出動するらしい。地元のお客さんも大坂さんが消防団員であることは知っており、皆理解してくれるとのことだった。大坂さんの奥さんも一人で店を回すのは大変な

のに、毎回送り出してくれるそうだ。自営業の大坂さんの場合でも、お客さんや奥さんの理解や協力があってこそ消防団員としての活動ができているのだなと感じた。

### 第3節 震災の経験

#### 3-1 2011年3月11日

インタビューの中盤、私はとうとう大坂さんに震災当日の話聞くことにした。正直、震災直後の話を聞くことには少し抵抗があった。大坂さんは消防団の仲間など知り合いを多く亡くされただろうし、捜索活動で凄惨な場面に何度も直面してきたはずだ。誰もしたくない話だろうし、中には話すことで嫌な記憶が蘇る人もいるのでなかなか自分からは聞きにくかった。ましてや私のような被災地とは関係のない人間に嫌な記憶を根掘り葉掘り聞かれるのを快く思わない人もいるだろう。しかし、年々震災を経験した現役団員は少なくなっており、当時の話を記録することは貴重なことだと考えた。大坂さんが震災当日親戚を助けに行った話をした時、思い切って震災当日の経験を聞いてみることにした。

\*1：地震起きたときは（・・・）？

Ot：自宅にいました。自宅の中にいて、当時あの一、液晶テレビが出始めた頃で店の中に液晶置いてたんで俺は死なねえがと思ってテレビ押さえて、倒れないように。で（揺れが）おさまったら、すぐ（消防団の）半纏着て、また地震きたら大変だなあと（テレビを）外して机の上に置いて消防（団の詰め所）に行ったら、その上を波がどーんっというってしまったというような感じ。被って180（cm）くらい入ったんですよ。家の中に。

\*1：家族の方はもう避難されたんですか？

Ot：大丈夫でした。

大坂さんは、竹駒町という地区に当時から住んでいる。竹駒町は市の北部に位置し、町内の南側を国道340号線と気仙川が通っている。平地が多い沿岸の高田町とは異なり、竹駒町は山がちな地形だ。海から離れている同地区は当時の津波防災マップで津波浸水想定区域に含まれておらず<sup>10</sup>、住民も津波襲来には備えていなかった。当時自宅にいた大坂さんは、とりあえず高田松原に住んでいた親戚を避難させようと、海沿いまで車を走らせた。

Ot：当時は10分前15分前に撤収というようなあれ（ルール、※10分前ルールについては後に詳述）はないから、一回その（親戚の）家まで行って、住んでる親戚を連れてこようかと思ったんだけど、もう避難しちゃってたから、あとそのまま車で戻ってきたんだけど、そこ（海沿い）にあと10分俺が時間ゆっくりいけば、もしくは10分

---

<sup>10</sup> 陸前高田市（2014年7月）陸前高田市東日本大震災検証報告書

早く津波が来てれば、自分もういないだし、（津波に）飲まれてるし（・・・）

高田松原は、広田湾に面した約 7 万本の松からなる松原で、特に夏には観光地として賑わっていた。しかし 10 メートルを超える大津波によりほぼ全ての松がなぎ倒され、奇跡的に倒れずに残った一本の松がかの有名な「奇跡の一本松」である。大坂さんは親戚の避難を確認すると高田松原を離れた。そのわずか 10 分後、最大 18 メートルとなる津波が松原を襲った。離れるのがあと 10 分遅ければ、大坂さんは津波に巻き込まれてしまったかもしれない。

松原を離れた大坂さんは竹駒町へ戻り、消防団の詰め所へと急いだ。先述の通り、竹駒町は当時の津波浸水想定区域からは除外されていた。そのため、普段から高台への避難訓練もあまり行われていなかったという<sup>11</sup>。しかし津波は気仙川を遡上し、竹駒地区を襲った。津波への備えがなかったこの地区では、津波が来る直前に逃げた人がほとんどである。大坂さんもこのうちの一人だ。

気仙川の水門を閉めに行った竹駒分団の団員が、川を逆上してくる津波を目撃し、車を U ターンさせる余裕もなく走って危険を伝えに来たのだという。

Ot: あの時やっぱり水門を見に行った消防団員が、津波来るのを見て、（車を）U ターンできる場所がなかったから 1 km くらい走って戻ってきたのね。『津波きてるから！』って言って。隣が保育園だったから、園児がいたから、やっぱり避難してたから外に、そっから高いところに（園児たちを）避難させたりとか。その（水門を）見に行った団員が帰って来なかったら俺らもまたそこで幼稚園児と一緒に亡くなってたのかなあ、っていうのがあるね。

消防団の詰め所の近くには、竹駒保育園もあった。津波が迫っていることを知った大坂さんたちは慌てて園児たちを高台へ避難させた。その後津波は竹駒地区を襲い、消防団の詰め所や大坂さんの自宅も被害を受けた。水門から走って危険を伝えにきた団員と大坂さんたちの避難誘導により、保育園の子どもたちは無事助かった。

東日本大震災では、水門を閉めに行った消防団員が数多く殉職している。そのため震災後津波警報が出ている中で水門を閉めに行くのは危険だという認識が広まった。一方これは水門を閉めに行ったことで危険を早く察知することができた珍しいケースである。

震災後に陸前高田市は、なぜ竹駒地区の住民が津波の備えがなく、かつ多くが津波を目視してからの直前の避難になったのに難を逃れることができたのかの検証を行った。<sup>12</sup>それによると竹駒地区には避難できる高台が多く、短時間で安全な場所へ避難できたことと、津波遡上の先端部付近にあたり沿岸部に比べ遡上の勢いが弱まったことが要因として挙げられ

<sup>11</sup> 東海新報（2014年5月23日号）あすへ残す教訓 陸前高田消防団⑧

<sup>12</sup> 陸前高田市（2014年7月）

ている。とはいえ、竹駒町では47名もの死者・行方不明者が出ており、日頃から地震発生と津波襲来を結びつけ、避難の意識があれば、犠牲者を少なくすることができたのではないかと報告書は指摘している。

震災当日、大坂さんは度重なる偶然により津波を逃れた。「もし松原に10分遅くついていれば」「もし津波が10分早く来ていたら」「もし水門を見に行った団員が戻って来なかったら」「もし高台が近くなかったら」、私はこうして今大坂さんに話を聞けていないのである。しかしそもそも「もし～していたら」という質問を投げかける事自体が間違いなのかもしれない。津波は当時とるべき行動を取っていた人も容赦なく飲み込んだ。高田町では市民体育館が避難場所に指定され、震災当日も多くの人がこの体育館に避難していた。しかし津波は体育館の屋根近くまで達し、避難していた人々のほとんどが犠牲になった。また最後まで住民の避難誘導にあっていた多くの消防団員も命を落とすこととなった。想定を超えるような大規模災害において「偶然」や「もし～」は結果論に過ぎないのかもしれない。

### 3-2 「最初はびびりながら」

3月11日の夜、大坂さんら竹駒分団は消防庁から国道340号の瓦礫撤去を任せられた。当時自衛隊をはじめ、警察や消防の部隊が全国各地から向かってきていた。市外から到着した緊急車両が通行できるよう、発生から3日間は瓦礫の撤去と交通整理を行った。当初携帯電話が繋がらず、大坂さんたちは竹駒町以外の様子が全くわからなかったという。変わり果てた高田の街の様子を目の当たりにしたのは、少し後になってからのことだった。

Ot: 高田の街、だからこっから(竹駒町から)下がどうゆう状況になっているかが全然わからなかった。情報も入ってこないし。だから聞いて初めてある程度自分らのやる事が終わってからそっち見に行って、びっくりして(・・・)ちょっとありえねえなあと(・・・)

竹駒分団が行方不明者の捜索に取り掛かったのは発災3日目のことだった。長い間地元に着し、消防団員として活動してきた大坂さん。捜索活動中、顔見知りのご遺体を見つけることも少なくなかった。

\*2: 救助してる中で、一番印象に残ったエピソードとか何かありますか？

Ot: あの不思議に(・・・)なんというのかな、一番最初に見つけたのが(・・・)3日目から救助活動・捜索活動に入ったんだけど、竹駒の近くまで流されてきた人が市役所の職員の人だったんですけど、偶然俺たちが見つけて搬送したね。近所の人だったね。亡くなってたんだけど。竹駒の地元の人をずいぶん見つけて搬送したっていうのが不思議かなっていうのか、あんなに何百体もの遺体を運んだりしたんだけど、まず一番最初がね。当然(遺体を)見たこともないし、最初1日2日はびびりながら、

すると不思議に慣れというか（・・・）慣れますね。

「最初はびびりながら」。これは、多くの団員の本音だろう。しかしこんな極限の状態でも「慣れる」ことができたのは、普段から火災などの訓練を積んできた消防団員だからなのか、それとも人間の適応本能なのかはわからない。余震や二次災害の危険もあるなか、消防団は当初半纏に長靴など限られた装備で捜索活動にあたっていた。その様子をテレビで見た医療関係の人々が「こんな装備では危険だ」と不織布の全身防護服を送ってくれたらしい。この全身防護服が届けられてはじめて、大坂さんは重装備が必要になるほど危険な作業をしていたことに気づかされたという。

Ot：これ知らないってというのは何もおっかなくて知らないから、逆にそういうの危ないんだよ、自分らが怪我したらそのあとが危ないよっていうようなことで（・・・）何日も経ってるものも運んだりするわけだから、必死で怖さ知らずでやってたんだなーっていうのが印象あるね。それ（不織布の防護服）をよこされた時にこんなおっかないことやってたんだっていうような（・・・）あとはもういっぱい助けられた。何かの形ではどんどん返していきたいなと思うんだけどね。

陸前高田には、震災後全国各地から消防団員が集まり、個人ボランティアとして復興に携わってきた。特に千葉県我孫子市の消防団からは多くの装備を寄付してもらうなど、今でも関係は続いているという。震災をきっかけに全国の消防団と地域を超えた繋がりが生まれた。大坂さんは「何かあったら自分たちも何かの形で恩返ししたい」と語っている。2018年の広島豪雨災害や、元旦の能登半島地震が発生した際には、現地の消防団へ支援金を送った。陸前高田の消防団は震災から13年たった今でも当時の「恩返し」を続けていた。

震災当初、全国から自衛隊・消防・警察など様々な部隊が駆けつけ、捜索活動にあたった。その中で消防団はどのような活動を行い、どのような役割を果たしたのだろうか。

\* 2：震災の救助とかの場面って消防団の方と他にも自衛隊とか救急隊とかそれこそそれ（レスキュー）を専門にしてる方とかもいたと思うんですけど、そこって仕事が分けられてたりするんですか？

Ot：（中略）やっぱり地元のこと知ってるのは消防団なんですよ。細かーいところ知ってるのは地元の消防団なんだよね。だから一緒に捜索活動するんだけど、要は消防団の方がどっちかという歩けるし、そしてたとえば車の中で（ご遺体を）見つけたと。車が開かない。そしたらレスキューの方に連絡して、呼んでから救助したとか。遺体搬送したとか。そういったことをやりましたね。

地元の地理に精通していた消防団は、応援部隊に比べ多く「歩けた」という。そのためご

遺体の発見や遺体搬送など「歩き」が多い仕事を任された。一方でご遺体の救出が難しい場合には、より専門的な技術を持つ警察消防のレスキューが引き継ぎ担当した。そして徐々に、自衛隊などは遺体の搜索、消防団は遺体の搬送と役割が分かれていったらしい。

Ot：自衛隊とか警察の人達がまずここに遺体がありましたと、そしたらそこに竹をさして紐結んでここにありましたよと。消防団員運んでくださいと。したら私らがそこに行って搬送するっていう。

\* 1：警察は運んでくれるわけじゃないんですね。

Ot：どっちかという運びもしたけども俺たちの方が搬送は多かったね。最初の頃は警察官も運んでくれたけども、(遺体を)持ってくところも結構奥の方に運んだから、応援隊の警察ってのは地理的にそうゆうのがわかんないから、だから消防団にありましたよ、お願いしますっていう(・・・)そうゆうような役割が自然についてきたんだよね。

毎日毎日、ご遺体を搬送する。これがどれだけ大変で辛い仕事か、想像でも計り知れない。それでも大坂さんらとはとにかく必死で毎日「歩き」続けた。しかし震災から2ヶ月近く経つと、会社員を務める団員が参加できなくなるなど、活動の人員も限られてきた。

Ot：でも日数(・・・)50日間俺たちやったのね。3月11日から最終が4月30かな。ほぼほぼ50日間俺たち搜索活動やってたんだけど、段々4月中頃くらいになってくるとそれぞれ仕事、会社員とか、もういい加減会社に出てこいということで搜索できる消防団員も限られてきてるわけね。どこもだと思うけど。それでも動かなきゃ、歩かなきゃいけないから。

活動できる人員が少なくなる中でも、大坂さんは最後まで「歩き」続けた。そして発災から50日後、消防団の搜索活動は終わりを迎えた。

### 3-3 見つけて、返してやりたい

大坂さんにはどうしても一つ聞いてみたいことがあった。自らも被災者である消防団員が発災直後から活動できたのはなぜなのか。何が彼らを突き動かしていたのか。そしてどういう思いで活動にあたっていたのか。私は小学生の時にテレビで見たシーンを振り返りながら大坂さんに尋ねた。

\* 1：私は震災当時小学校2年生で、テレビでなんとなく覚えてるのが、翌日から半纏着た消防団の方々が搜索とかされているのを見たんですけども、消防団の方々って地域住民なので自らも被災されてたり、家族亡くされたり行方不明になってるわけじゃ

ないですか。そんな中どうゆう思いでやっていたんですか。

Ot：うーん（・・・・）多分それは一番感じてるのは高田町の高田分団っていうのがあるのね。その辺の団員たちが結構親流されたり、きょうだい流されたり自分らの子供が流されたり（・・・・）それでも消防の半纏きて搜索活動はしてたね。どうゆう気持ち（・・・・）見つけたい。見つけて返してやりたい。そんな感じだったのかな。

高田町は、陸前高田市で最も多くの犠牲者が出た地区である。高田分団では30人近い団員が亡くなり、生き残った団員もみな誰かしら大切な人を津波で亡くしていた。私は、この答えを聞いて、大坂さんが消防団員全体の代弁者として答えることは難しいのかもしれないと感じた。同じ陸前高田市の消防団でも被害の最も大きかった高田町の分団と竹駒の分団とでは別の経験をしている。3/11の体験は団員一人一人異なるし、皆それぞれが思っていることもあっただろう。そしてとくに家族が行方不明になりながら活動した団員の心境を代弁することは非常に難しいのかもしれないと思った。

Ot：俺たちの方は家は流されたけど家族はみんな無事だったっていうのが私らの分団だったから（・・・・）

それでも、心身ともに疲弊しながら、早く「見つけて返してやりたい」という思いは全消防団員共通だろう。しかし、とくに高田分団の団員にとっては精神的に辛い作業だったようだ。

Ot：だからね、高田分団の方はけっこう団員こっち（心）がやられてた団員が多かったっていうのは聞いている。嘘か本当かわかんないけどある（避難所の）小学校とか屯所で寝てると、夜、（本当はしてないのに）ノックの音がするとか、そんな話も聞いた事があるしね。（中略）その団員からは目を離すなよとか。気遣ってやれよとか。そういう話もずいぶん聞いたことはあるね。

実際、高田分団の中にはPTSDを発症した団員もいたようだ<sup>13</sup>。一方の大坂さんは、家が流されたことや職がなくなったことへの不安はあったものの、大きな精神的ストレスは感じなかったという。

\* 1：やっぱり消防団員だからこそ（精神的に）苦勞されたところも多かったんですかね。

Ot：メンタル面でね、うーん（・・・・）けっこう他から見れば大変だ大変だって言われ

---

<sup>13</sup> 東海新報（2014年7月4日号）あすへ残す教訓 陸前高田消防団②

てるって思ったけども、自分はそんなには心まで病んでるってことはなかったと思うんだけどね。確かにあの一、夜寝られないとか、家流されてこれからどうしようとか、仕事も無くなったとか結構あるんだけども、でも（・・・）大丈夫だったね。どうかなるかな、と。

そう語った大坂さんでも、やはり同じ消防団の仲間を失ったことへのショックは大きく、また突如として多くの命が失われたということに対する衝撃が後から襲ってきたらしい。

\* 1：震災を振り返ってみて個人としてはどうゆう感情を抱いているんですか？

Ot:人が亡くなったっていうのが（・・・）自分の知ってる消防団の先輩、仲間が（・・・）その人たちを亡くしたっていうのは（・・・）後からきたね。

\* 2：後からなんですね。

Ot:その頃は、とにかくあの一、やんなきゃいけないことが多くて、瓦礫撤去とか、毎日歩き回って、だからそれが終わったあたり（・・・）5月あたりに（・・・）後からかな、色々と考え始めたのはね。あの人もいなくなったんだ、こーゆう人もいなくなったんだってね。

大坂さんは最初の50日間は消防団の活動、その後は自宅の建て直しや店の再建などで常に動き回っていた。それが精神的に逆によかったのかもしれないと大坂さんは振り返っている。ただ、夜眠るときに亡くなった消防団の仲間を思い出すことはあったようだ。

#### 第4節 震災後、団長になって

##### 4-1 「死なない、死なせない」

東日本大震災をきっかけに、消防団においても多くの体制が見直された。一つ目は、通信手段である。震災以前は、団員同士の連絡は主に携帯電話で行われていた。しかし震災当日、電波が繋がらず団員同士の連絡が取れなくなり、大きな混乱が起こった。そこで震災後、団員一人一人にトランシーバーを配布し、消防署からの無線が常に入るようにした。そのほかにも水門の閉扉が手動から自動になり、消防署や消防団屯所も津波の被害を受けにくい高台へ移設された。そして、消防団員の殉職者を出さないために新たなルール作りが進められた。

これが、いわゆる「10分前ルール」である。震災当初、多くの団員が津波到達のぎりぎりまで避難誘導や水門閉扉などにあたった結果、命を落とした。この反省を踏まえ、津波警報・注意報が発令された際は津波到達予想時刻の10分前までに団員も避難を全員完了する、というルールが作られた。

\* 1 : 今、震災を実際経験した団員の方がどんどん少なくなってきているっていうお話だったんですけど、消防団として、後世に何かを残したいっていうのはあるんですか。

Ot : うーん(・・・)みんなそれぞれやってるし、(・・・)ただあの、なんだろうな、震災とかそういうこれからまたおっきなものがあつた場合はね、まずはね、絶対死なない、死なせない。自分、誰かその時に誰か一人助けようと思って自分も死んでしまったっていうのは(中略)ほんとに言い方悪いんだけど、責めてるわけじゃないんだけど、そこで一人助けようとして自分も流された、生きてれば、その後から何十人、何百人の人のためにもできるし、だから絶対殉職者、出さない、絶対死なせない、自分の命とにかく自分で守る、って言ったのがこの大坂団長(故・大坂淳さん)なんですよ、だからそれを引き継いで、やっていかなきゃいけないのかなと思ってるところですね。

大坂さんは、部屋に掛かっていた先代の故・大坂淳団長の写真を指差しながらこう熱く語った。この大坂淳団長は、震災当時最も被害が大きかった高田分団の分団長で大坂さんの親戚にあたる。多くの仲間を失った大坂淳団長は、亡くなるまで団員の安全な活動のための仕組みづくりに奔走した。「絶対死なない、死なせない」という大坂淳団長の想いは今でもしっかりと受け継がれていた。そして大坂さんも、この想いを次の世代へに引き継ごうという強い意志を感じた。

しかし、この「10分前ルール」が導入されても、「目の前でまだ避難していない人がいるのに逃げなきゃいけないのか」というのは団員にとって当然の心情である。果たして本番でも団員は目の前の人を置いて逃げることができるのだろうか。これには大坂さんも答えるのが難しそうだった。

\* 2 : 今後もし、何か大きな災害とかがあるかもしれないっていう時に、消防団の方とかがどうゆう(・・・)

Ot : (心の中で)線を引くかっていうことでしょ？

\* 2 : やっぱ(消防団員という)立場があると、

Ot : (線を)超えていいのか、ただ自分らは10分前になったらこっちからこっちへはいきません。必ず自分は安全区域にいなさい。そう言っても『知り合いがこっちの方にいる』(つてなつたら)、あともうそこは個人の判断しか(・・・)ただ僕たちは『行くな、やめろ』『撤退、撤収』っていうのはこっちからは言えるんだけれども、難しいね。

\* 2 : そうですね、何が正しいかっていうのは出せないですもんね。

いくらルールづくりが進んでも、人間には抗えないものがある。知り合いや顔見知りの人をおいて逃げるというのはとても酷なことだ。そして、消防団員という立場上、後になって

「消防が先に逃げた」と後ろ指をさされる可能性だってある。当時ルールはなかったが、大坂さん自身も震災当日に沿岸部へ親戚を助けに向かっている。目の前の人を助けたいという心情は痛いほどわかるはずだ。しかし大坂さんは今、団長として「撤退」を命じなければいけない立場にある。

Ot：最後までずっと引きずってしまうけども、後のことを考えると、その一人を、変な言い方だけど犠牲にしてしまうよりも後で何十人何百人を助けられるんだからってというのがあると思うんだけどねえ（・・・）でも実際にそこに行ってみないと、それで割り切れれば一番いいのかなとは思うんだけど。

「絶対死なない、死なせない」と分かっているけども、目の前に助けが必要な人がいたら助けに行ってしまうのが消防団員の性だ。しかし 600 人近い団員をまとめる大坂さんは今、団長として、とにかく殉職者を出さないことを心がけているという。市民もこういったルールを理解し、消防団に促されずとも自主的に避難するよう意識を変えていかなければならない。

#### 4-2 変わってしまった消防団

津波で大きな被害を受け、陸前高田の町並みは大きく変わってしまった。中心部は 10メートル嵩上げされ、かつての市街地があった場所は地面に埋もれた。アバッセたかたなど複合商業施設もできたが、震災前のような活気は 13 年経った今でも戻っていない。

\* 1：震災以降米沢商会は残ってますけど他が解体されたりとか、そういうのに対してはどう思ってるんですか。

Ot：高田のまちは空き地だらけだね。草だけ生えて、昔はそうでもなかったんだけど。どう変わっていくのかなーって。市長は大学誘致するって言うてるけど来るのかなとか、こっちからゆっくりと今後見させてもらおうというような感じですかね。

変わったのは高田の街だけではない。消防団の伝統も、大きく変わってしまった。

\* 2：やっぱ土地とか変わったから消防団の今まで認識してた土地勘とかも変わったり、訓練の仕方とか結構変わりました？

Ot：元に戻そうと思ってました。昔のように逆に。昔は一斉に三十何台で放水して、市内行進して、出初式の式典に入ってただけども、今は地形が変わってしまったんで、なかなか三十何台が一気に水を上げるってことができないっていうような地形になってるから、これから、もう少しあの一、整備、水を十分に取れる所を作ってもらったりとか、それで、昔のような消防団に戻していければいいなと。まだまだ簡素化されてる

ような行事だから、昔のような形に戻せれば、俺の代で戻せれば戻りたいけど、ちょっとやっぱ無理まだまだ（・・・）難しんだよな。

出初式とは消防が1月初旬に行う仕事始めの行事であり、消防にとって最も重要な行事の一つだ。震災前は盛大に行っていた出初式が津波被害による水利事情の変化により簡素化されているのだという。水利状況の改善には行政なども巻き込んでいかなければならず、大坂さんら消防団の力だけではどうにもできないらしい。大坂さんは自分が引退する前にどうか以前のような規模で行事を行えるように尽力しているが、実現はなかなか難しいようだ。

また、消防団の人員減少は全国的な問題となっており、陸前高田もその例外ではない。

Ot: 今消防団って本当に厳しいんですね。家族の時間、それから友人と過ごす時間、そっち方がほんとに大事になって（・・・）

地方での少子高齢化に加えて人々の価値観が変化し、プライベートの時間が重視されるようになった。大坂さんが入団した時代に存在した地縁は薄れ、若い世代で地域コミュニティが軽視されるようになった。団員の中でも、訓練に十分な時間を割けないといった声もあるようだ。近隣の消防団では、団員の負担軽減のため、操法競技会への参加を見送ったところもあるという。このような悩みは全国の消防団が抱えているが、それに加えて、被災地ならではの苦悩もあった。

Ot: ただ、若い団員が入ってこない。震災後すぐ2、3年してから団員確保して、もう一回全部立て直そうと思ったんだけど、結構親御さんの方で消防に入れたくない、こうゆうのも結構ありましたからね。

震災で多くの殉職者が出た陸前高田では、消防団＝危ないという考えが広まってしまった。「息子を団員にしたくない」という声があったことも事実で、人員確保における大きな課題となった。震災から10年以上が経ち、そのような声は少なくなってきたというが、消防団員という仕事に対する住民の意識は震災前に比べ変わったままだ。

### 第3章 地域住民が消防に参加する意義

#### 第1節 物理的な面と精神的な面

ここで、今回の問いである「地域住民が消防団として活動する意義」について考えていきたい。今回のインタビューを通じて、消防団の存在意義は物理的な側面と精神的な側面の二つの面があるというふうに感じた。

まず、物理的な面についてであるが、これは常備消防だけでは足りず、消防団が消防機能として物理的に必要だということだ。これについて大坂さんは次のように述べている。

\* 1：(前略)火を消すっていう普通消防士さん、常備消防がやる仕事を一般住民、地域住民がやってる意味とか意義ってのはどうゆうところにあると思いますか。

Ot：まずは、消防署だけでは足りないってところね。大体は消防署だけで間に合うんだけど、消防署から遠い地域だとか、それ(火災)が二箇所三箇所でも多発したらどうしようもないから、どっかは消防団には頼らなきゃいけない。実際に二箇所(火災が)同時多発ってこともあったから、絶対必要は必要なんだよね。消防署の職員だって高々人数が三十何人だし全国的にも少ないから、だからどうしても消防団は必要だとは考えてますね。

現在、日本の消防本部の約6割が小規模消防本部である<sup>14</sup>。さらに地方部では消防本部が装備・人員ともに小規模であるのにも関わらず、その管轄範囲が広大である場合も多い。そこでひとたび火災や災害が発生すれば、常備消防だけでは明らかに人手や装備が不足してしまうのである。よって消防団は常備消防の不足を補う上で不可欠な存在であり、消防団があってこそ地方の消防行政が成り立っていると言っても過言ではないのだ。

次に精神的な面についてであるが、消防団は各地域に密着しており、住民の安心安全の拠り所になっているのだ。長年消防団員を勤めてきた大坂さんは、地域と消防団の関係についてこのように感じていた。

\* 1：消防団の活動を通じて、地域でどのような結びつきが生まれているんですか。

Ot：やっぱり信頼されてる。どうしても困ったことがあったらまず消防団のほうに来るんですよ。崖が崩れそうとか、大雨の避難の時だとか。消防団っていうのは地域に本当に密着してるんで。この家は一人暮らしだとか、こっちの家の方にはたとえば動けない人がいるとか、そういった情報も全部持ってるんで。本当に貴重な消防なんだよね。

消防団は地域住民と深い信頼関係を築き上げている。そもそも消防団自体が地域住民で構成されているため、住民にとっても非常に身近な存在になっているのだ。消防団は地域防

---

<sup>14</sup> 永田 尚三(2022年)「わが国における市町村消防行政の現場分析」武蔵野大学政治経済研究所年報

災の中核を担うだけでなく住民にとっての気軽な相談所にもなっており、地域住民の安全安心のために不可欠になっている。

さらに消防団は住民に関する詳しい情報を有しており、避難の際も誰に助けが必要かなど把握できているのも大きな利点だ。また地元の地理に精通している消防団が現場で一番「歩ける」存在なのは過去の事例を見ても明らかであり、（日航ジャンボ機墜落事故では山奥の現場に消防団が最も早く現着した。大坂さんも、消防団が一番「歩けた」という）その特性を活かした活動を現場で展開することもできる。消防団は地域防災において物理的・精神的の両面で必要とされている組織なのである。

## 第2節 つながりが生まれる場所

さらに、消防団は団員にとって新たなつながりが生まれる場所にもなっている。大坂さんも人をつながりが生まれるところが消防団最大の魅力だという。

\*1：大坂さんが消防団に入って、これはよかったなあって思うことってありますか？

Ot：やっぱり人との付き合い方が広まるっていうか。まず最初は、小さい自分らの地域だけの消防団、そして段々自分に役がついてくると同じ市内の消防団とも付き合いようになるし、また団長、副団長になると今度県内の消防団の方たちとも色々付き合いが出てくるんで、本当に勉強になりますね。

\*1：かなり普段知り合えないような方々とも…

Ot：出てきますね。付き合いが。

地域住民によって構成された消防団は、いわば地域コミュニティの代名詞のようなものだ。消防団は、団員にとって様々な人との交流の場となっており、このようなつながりは消防団でしか得られないものだ。もう一つ消防団でしか得られないものが仲間の存在である。

\*1：一緒に消防団をやってる仲間っていうのはどうゆう存在なんですか。

Ot：やっぱり自分が入った頃には頼りになる先輩がいっぱいいたし、自分がかんかん歳と取って上に立ってくると下を頼る、そういう人材を作っていくのが自分ら上に立ってるメンバーの仕事の一つだと思うし、同じく一緒にやってきた人たちにも同年代の消防団にも随分助けられたし、一つ二つ下の後輩にも助けられて今があるっていうのは事実ですね。特に震災の時なんかは後輩たちに随分助けられたし、そういった思いでやってますね。

\*1：じゃあやっぱりお互い助け合っていう。

Ot：ですね。もういい仲間ですね。消防団終わったとしても付き合いあるんで、いい仲間だと思いますよ。

お互いに困っていることがあれば助け合い、一生つき合うような仲間を得ることができ、こうした人と人との深い繋がりが生まれる場所が消防団なのである。地域コミュニティの崩壊が叫ばれる今、こうした場は大変貴重であり、今後も地域社会を維持していく上で重要になるであろう。

### 第3節 今後の展望

震災の影響により、陸前高田に住んでいた多くの人が市外へ移り住んだ。そして消防団でも、退団する人も多く存在した。しかし大坂さんは、移住したり、消防を辞めたりしようという考えは微塵もなかったようだ。

\* 1：大坂さんは、ご自宅も被害に遭われて、どこかに移り住もうとか、消防を辞めた  
いとかは思わなかったんですか。

Ot：ならない。うん、逆になんとかしなきゃと。今の自分がやんなきゃダメでしょって  
いう思いの方が強かったね。

こういった思いを持った人たちのおかげで今の陸前高田があるのだと強く感じた。そして消防団の再建もこういった強い意志がある団員のおかげで実現したのだろうと思った。

最後に、将来消防団にどうなって欲しいか大坂さんに尋ねた。すると答えは、意外と現実的なものだった。

\* 1：今後10年20年消防団はどうなって行って欲しいですか。

Ot：最低現状維持で。今のこれを維持してもらえれば。最低ね。もうほんとに難しいから、入ってくる人もいないし、ますます減る一方だから最低限今のレベルを維持して欲しいってのがあれかな、本音だね。

現在の消防団を取り巻く環境がいかに厳しいかがわかる答えである。陸前高田の少子高齢化を食い止めることは難しい。限られた人員で、いかに地域の安全を確保していくのか。大きな課題が残されている。

## 第4章 終章

### 第1節 これまでのまとめ

前章で述べた通り、地域住民が消防を行う意義として、物理的・精神的な側面、そして地域コミュニティや繋がりの形成の場となっていることを挙げた。消防団は、地域社会に必要とされていることは明らかだ。安心・安全の面でもそうだし、地域コミュニティが崩壊した現代において地域活動の維持に不可欠な存在だ。しかし、消防団は衰退の一途を辿っている。各地の消防団は機能別消防団の導入や女性団員の活用などの対策を行なっているが、これ

に加えて、消防団の役割の見直しや若者が入りやすい組織への変化が求められているのかもしれない。

## 第2節 きたるべき災害に備えて、消防団はどう変わるべきか

災害大国と言われ、地形的にも気象的にも厳しい自然条件にある日本に住む我々がすることは、常に最大の備えをすることである。今までの大災害の頻度から言って、私の生涯で災害が我が国を襲うことは避けられない運命なのかもしれない。地震調査研究推進本部地震調査委員会は南海トラフ地震の30年以内の発生確率を70～80%、首都直下地震に関しても70%程度と予測している<sup>15</sup>。

これまで述べてきたように消防団の衰退は地域防災力の弱体化を意味する。現在団員の高齢化や団員数の減少など、消防団を取り巻く環境は厳しいが、地域防災の要として今後も存続するべきだ。そのためにはやはり若者が入りやすい環境を整備することが重要だ。

「若い団員が入ってこない」。これは陸前高田だけでなく、全国の消防団が共通して抱えている問題である。地域コミュニティの崩壊により地縁が失われ、若者は社会的に孤立するようになった。若者の地域社会への参加が減るにつれ消防団に入団する若者も減っていき現在へ至っている。そこで消防団を若者が入りやすい組織になるように見直しを行い、若者が人とつながりを持てる場となれば、再注目されるのではないか。消防団は幅広い年代の人とつながるだけでなく、同世代の友人を作ることができる場でもある。大坂さんもこれは消防団に入ることの大きなメリットだという。

Ot：入ってれば町内だけじゃなくて市内の同世代の人とも話ができるんで結構なメリットはあるんじゃないかなと思うんだけど、今は別に対面で話さなくても、今はこうゆう（スマホを指差す）ので話ができるから必要ねえやってもあるかもしんないね。

しかし、オンラインでのコミュニケーションが当たり前になった今だからこそ、対面でのコミュニケーションの大切さに我々は気づき始めている。たとえば、中学・高校生対象に入団体験のプログラムを実施することで実際に消防団の魅力を知ってもらい、入団してもらうきっかけを作ることなども出来るだろう。一時は地域社会から離れていった若者がもう一度地域社会に参加できるように、消防団がその後押しをできるような存在に変われば、衰退を食い止めることができるのかもしれない。

---

<sup>15</sup> 国土交通省 HP「国土交通白書 2020」

## 参考文献

- 濱口 和久 (2020年3月) 「地域社会における消防団の位置付けと課題について」 拓殖大学政治行政研究 11 19-36  
<https://cir.nii.ac.jp/crid/1050285299735912960> (閲覧日 2024/12/23)
- 国土交通省 HP 「国土交通白書 2020」  
<https://www.mlit.go.jp/hakusyo/mlit/r01/hakusho/r02/html/n1222000.html> (閲覧日 2024/12/23)
- 永田 尚三 (2022年) 「わが国における市町村消防行政の現場分析」 武蔵野大学政治経済研究所年報 <https://www.musashino-u.ac.jp/research/pdf/わが国における市町村消防行政の現状分析.pdf> (閲覧日 2024/12/23)
- NHK Web (2024年3月) 「【震災13年】消防団員の減少が深刻化 地域のつながりにも影響」  
<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20240309/k10014382311000.html> (閲覧日 2024/12/23)
- NHK クローズアップ現代 (2024年9月) 「その時助けは来るのか？能登半島地震初動検証から考える」 <https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4935/> (閲覧日 2024/12/23)
- 陸前高田市 (平成26年7月) 陸前高田市東日本大震災検証報告書  
<https://www.city.rikuzentakata.iwate.jp/material/files/group/61/kensyouthoukokusy o.pdf> (閲覧日 2024/12/23)
- 清水 航己 (2024年2月) 「能登半島地震、初動対応に問題も防災研究の第一人者は『発災からこれまで』と『これから』をどう見るか」、47news  
<https://news.yahoo.co.jp/articles/2a20b84d7e2a0e5cb2bea27fcabb773fbb584328> (閲覧日 2024/12/23)
- 総務省消防庁 「消防団の歴史」  
<https://www.fdma.go.jp/relocation/syobodan/about/history/> (閲覧日 2024/12/23)
- 総務省消防庁 「I 消防団の現状と課題と検討の方向性」  
[https://www.fdma.go.jp/singi\\_kento/kento/items/kento259\\_03\\_houkoku1.pdf](https://www.fdma.go.jp/singi_kento/kento/items/kento259_03_houkoku1.pdf) (閲覧日 2024/12/23)
- 総務省消防庁 「消防団の現状と課題と検討の方向性」  
[https://www.fdma.go.jp/singi\\_kento/kento/items/kento259\\_03\\_houkoku1.pdf](https://www.fdma.go.jp/singi_kento/kento/items/kento259_03_houkoku1.pdf)
- 総務省消防庁 「令和2年版消防白書」  
[https://www.fdma.go.jp/publication/hakusho/r2/topics3/56717.html#:~:text=\(3\)消防団員の平均,特集3%2D2図\)%E3%80%82](https://www.fdma.go.jp/publication/hakusho/r2/topics3/56717.html#:~:text=(3)消防団員の平均,特集3%2D2図)%E3%80%82) (閲覧日 2024/12/23)
- 東海新報 (2014年5月23日号) あすへ残す教訓 陸前高田消防団⑧